

眠りから覚めて、目を開けると、自分の部屋の天井がぼんやりと見えてきた。ほんの少し首を起こし、壁にかけてある時計に目をやる。

時刻は午後一時ちょうど。普段なら、高校の教室でお昼ご飯を食べ終えて、ひと息付いている頃だ。

上半身を起ここして、長く息を吐き出す。

昨晚、僕を苦しめていた三八度を超える熱は、どこかへ行ってしまったようだった。

額に張ってある冷却シートは、水分を失って干からびていた。うっとうしいので剥がすと、独特の薬臭い匂いがした。剥がしたシートを、丁寧に二つ折りにしてゴミ箱へ投げ入れる。見事に一発で入り、思わず口元が少し上がった。

再び横になろうとしたとき、部屋のドアがノックされ母親が入ってきた。外出用の服装をしている。手に持ったお盆の上には、コップとスポーツドリンクのペットボトルが乗っていた。

「起きてたんだ。熱はどう？」

母親は、コップとスポーツドリンクを机の上に置く。

「だいぶ楽になった。まだ熱計ってないけど、平熱だと思う」

「よかった。お腹は空いてない？ おかゆか何か食べるなら、持ってくるけど」

何か食べておこうかと思ったが、まだ食欲がなかった。

「いいや。腹減ってないし」

「そう。母さん、もう仕事に行かなくちゃいけないから。お腹が空いたら、自分で適当にやりなさい。レトルトのおかゆも買ってあるから」

「分かった」

じゃあ行ってくるね、と母親はお盆を抱えて部屋を出て行った。

ベッドから出て、机へ向かった。ほんの二、三步なのによるめいてしまった。スポーツドリンクを手取る。普段なら簡単に蓋を開けることができるのに、指に力が入らない。熱だけでなく体力もどこかへ行ってしまったようだ。

コップの半分ほどまで注ぎ、一気に飲み干した。自分でも気がつかなかったが、そうとう喉が渴いていたようだ。

ベッドに戻り横になると、玄関の閉まる音が聞こえた。母親が家を出たようだ。父親も仕事に行っているのだから、家にいるのは、今、家にいるのは僕だけ。両親が家に帰ってくるのは、早くても午後九時過ぎになるだろう。

もうひと眠りしようと、目を閉じると、すぐに眠気がやってきた。

携帯電話の音で目が覚めた。部屋は薄暗い。目を凝らして時計を確認する。時計は、午後六時を表示していた。

誰からの連絡だろうか。

ベッドから出て部屋の電気を付ける。電灯のまぶしさに目を開けていられない。

明るさに慣れてから、机の上に置いてある携帯電話を手を取った。

着信は、電話ではなくメールだった。送り主は、クラスメイトで友達の福井だ。福井とは、高校一年生の時に席が近かったことがきっかけで仲良くなった。少し間の抜けたところがあつ、周りから天然キャラとして認知されていた。

メールフォルダを開き、メールの文を確認した。
「おっす。体調は良くなった？ 早く治して学校来いよ！」

明日かあさつてぐらいには行けると思う、と返信をして携帯を置いた。
きゆるー、とお腹が鳴った。思えば、昨日の昼から何も食べていない。

台所へ行こうとドアノブに手をかけたとき、家の壁に何かがぶつかった大きな音がした。
音と共に振動も伝わってくる。

「何だ？」

首をかしているると再び大きな音がした。一度目よりも、大きな音と振動だった。

「外、だよな」

三度目の大きな音がした。音は、徐々に大きくなっている。音の正体が分からないので
気味が悪い。

四度目の音がした。

部屋に一つしかない窓が揺れた。というより、バン、と叩かれた。カーテンが閉まっ
ているので、外の様子は分からない。

「ここ二階だぞ」

恐る恐る窓に近づき、カーテンを開く。

窓の外には福井がいた。

「よっ。熱下がった？」

学校帰りに寄ったように学ラン姿だった。柵を掴み、わずかな出っ張りに足をかけて器
用に体勢を保っている。

「どうした、ポカンとしちゃって。あ、まだ熱があるのか。安心しろ。りんごを持ってき
たぞ。風邪を引いた時にはりんごが良いんだ」

背中のリュックを、これ見よがしに揺らす。

「いや、いろいろツッコミどころが……。その前に、ここ二階なんだけど」

「この前フリークライミングをしてさ。同じ要領でいけば、登れるんじゃないかと思っ
て。出っ張りを掴んで足をかけて、なんとか登れたよ」

さすが福井。論点がずれている。僕が確認しなかったことは、どうやって登ったのかで
はなく、なぜ登ったかだったのだが。

「いや、そうじゃなくて。落ちたら危ないよ。入るなら玄関から入れよ。インターホン鳴
らせば、起きて出たのに」

「いやあ、登ったほうが、びっくりするかなと思っさ」

驚きはしたが、今にも落ちそうで危なっかしい。

心臓の鼓動は早まる一方だ。

「とりあえず手と足が疲れてきたから、窓開けて中に入れてくれないかな」
言われて気が付いた。カーテンは開けたが、窓を開けていなかった。

「ちよっと待ってる」

鍵を外して窓を開けた。

柵の上には七〇センチ程の隙間がある。跨げば、部屋の中に入れる。

「ゆっくりな。焦るなよ」

「大丈夫だって。心配し過ぎ」

福井が腕に力を入れて体を持ち上げようとした。
「あっ」

福井の両足は、おそらく本人の意図しない方向へ投げ出された。
そのまま、両腕が柵から離れる。

僕は身乗り出し手を掴もうとする。しかし、掌が空を切った。

福井が地面に叩きつけられる鈍い音がした。

部屋を飛び出す。階段を駆け降り玄関へ向かう。外に出ると、倒れている福井の姿。
駆け寄って、声をかける。

「大丈夫か！」

福井は、僕の手を握り、か細い声を出した。

「救急車……一七……」

高校の校門前は登校してくる生徒で溢れていた。学ランのポケットに入っている携帯電話が振動した。

メールを一件受信していた。

〈私、福井。今、あなたの後ろにいるの〉

一八〇度後方を確認する。

「よっ。おはよう！」

右側に抱えた松葉杖で体を支えている福井の姿があった。痛々しい姿とは不釣り合いなぐらいの笑顔だ。

不幸中の幸いか、福井は右足の骨折で済んだ。いくつかの掠り傷と打撲というオマケ付きだったが。

落ちた後、すぐに救急車で病院へ運ばれた。命に別状はなかったものの、大事を取って一晩入院した。

「いや、けっこう不便でさ。学校来るのに、いつもの二倍時間かかった。まいったまいった」

「まいったまいったじゃねえよ。病み上がりなのに玄関まで全力疾走したんだぞ。しかも、一七は時報だし。救急車じゃねえし」

僕の方も、熱がぶり返し二日間寝込むはめになった。

「骨折で済んだからよかったけど、打ち所悪かったら、洒落にならなかったぞ」

「心配と迷惑かけてスマン」

福井は真面目な表情になり頭を下げた。

「無事だったから許す！ まあ、その、もともとはお見舞いで来てくれたわけだし」

チャイムの音が聞こえてきた。チャイムの音を聞いて周りにいた生徒たちが走り出す。

「俺、この足じゃ走れないよ！」

「あきらめてゆっくり行こう」

「ありがとう！ 命の恩人！ ありがとう！」

福井は、松葉づえを持っていない左手で、僕の手を握り大きく揺らす。

「大げさだっ」

僕と福井は校舎へ向かってゆっくりと歩きだした。